

自分なりに考えてみたかったのである。

編纂の過程では色々な思い出があるが、一つだけ書いておきたい。それは、この「大学史」が元号表記をとっていることについてである。事務局が作成した原案は、西暦表記を基本とし、必要に応じて元号をつけるというものであった。しかし、会議の席上、ある委員から、「西暦で〇〇年度とすると、アメリカなどの会計年度との違いが出てくる」という「高説」が開陳されたため、思わぬ結果となってしまった。あえて評価はまじえず、事実のみを記しておきたい。

完成された「大学史」を手にするとき、これまで実務を担当しながら執筆にあたられた助手の方々や嘱託職員の方々の御努力に、ただ感謝するばかりである。ときには深夜まで黙々と作業にあたられ、いまは本学を離れてそれぞれの場で活躍されている方々に報いるためにも、この四月から衣更えして「資料室」として再出発することになったから、名古屋大学が日本の近代史のなかで、どのような役割を果して来たかという面に光をあてていくことが必要となるであろう。

(文学部教授)

法学部の色

編集委員 神保文夫

どの大学にもスクール・カラーがある。学風ないし伝統(School Tradition)という意味での名古屋大学のそれは

といえ、人によつてさまざま意見もありうるであろうが、飯島宗一元学長が入学式の式辞等ではしばしば口にされてきた、「自由」を思い浮かべる人も少なくないことであろう。

他方文字通りのシンボル・カラー（色彩）としての名大のスクール・カラーは、「濃緑」であるという。応援団の団旗の地色がこれで、体育会の機関誌も「濃緑」と題する。しかるに後者の説明によれば、『濃緑』は「ダークグリーン」とは名古屋大学のスクールカラーである。濃は不屈・永遠を表わし、緑は若さを表わすものである」とされている。「濃緑」が名大のスクール・カラーに選定された経緯等について筆者は知るところがなく、『名古屋大学五十年史』にもこれに関する記述は見えない。色彩シンボルとして「緑」が若さを意味することは古来認められるところであるが、「濃」が不屈・永遠を表わすというのは何に由来するのであるか。例えば常緑樹の葉がいつまでも緑色をしているというようなことからの発想かとも思われるが、「濃」じたいにそのような意味があるのかどうか、よくわからない。ともあれ、「天空浮脩眉、濃緑画新就」（韓愈『南山詩』）と詠われたごとく、「濃緑」が力強い若さを象徴するにふさわしい色彩であることは間違いないといえよう。

ただこれを「ダークグリーン」というと、darkにあまり良い語感を感じないのは筆者だけであろうか。貧しい語学力で英語の語感がどうのこうのというのははなはだ気がひけるのであるが、これが deep green であれば、日本語の「深緑」といかににもよく相通ずる感じがする。坂上是則の歌に「深緑常磐（ときは）の松の影にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ」（『後撰和歌集』）とあり、あるいは『源氏物語』（濔標）にも「松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる、袍（うへのきぬ）の濃き薄き数知らず」などとあつて、「深緑」はなかなか文学的香気ただよう色彩であるが、dark green は直訳すれば「暗緑色」で、こちらは「河の水は暗緑の色に濁つて、嘲りつぶやいて、溺れて死ねと言はぬばかりの勢を示し乍ら」（島崎藤村『破戒』）、また「暗緑色に濁つた濤は砂浜

を洗うて打ち上った藻草をもみ砕かうとする」(寺田寅彦『嵐』)などと、あまり美しい情景を描写するときには使われない色のようである。

もつとも「深緑」と「濃緑」は同じ色かどうかという問題があるが、常識的には「深緑」は濃い緑色すなわち濃緑色であって、『広辞苑』などの説明もそうなっている。「ふかみどり」はやまとことばで、それに相当する漢語が「濃緑」ということであろう。「深緑」を「こきみどり」と訓じた例は、『日本書記』持統天皇四年四月条に「其の朝服〔みかどころも〕は……勤〔ごん〕の八級には深緑〔こきみどり〕とあるがごとくである。もちろん同じ「深緑」といつても、実際の色調は時代によって変化があったであろうが、「深緑といふは萌黄色の深きにて、俗に梅松色とも木賊いろともいふ色なり」(『安斎随筆』)というのが服飾の故実である。

ところで名大法学部にも、「色」がある。正式に制定された法学部のシンボル・カラーである。学生はもちろん、教職員でもそういうものがあるということすら知る人は今ではほとんどいないのではないかと思われるが、昭和三十三年(一九五八)六月六日、法学部教授会は「色別について(学部色彩表示の件)」なる議題について協議し、「学部を色彩で表示する必要がある場合には法学部にはグリーンを用うることが決定した」。教授会記録にはこの決定事項が書いてあるだけで、なぜ学部の色彩なるものを選定することになったのか、他学部も同様なことをしたのか、法学部はなぜ「グリーン」を選んだのかなど、委細は不明である。東大法学部に明治三十四年(一九〇一)創立の「緑会」という組織があり、昭和三十三年当時の名大法学部の教授会メンバーは柏木千秋学部長をはじめ大半が東京大学の出身者であったから、「グリーン」の色はあるいはそのようなところからの連想ではなかったかとも憶測されるが、せっかく選定したこの色も、実際にはほとんど使用される機会がなく、まもなく忘れ去られてしまったようである。このような些細なことも含めて、名誉教授の先生方に聞き取り調査をしておくべき事柄はなお数多

くあるように思われる。

(法学部教授)

大学史編纂に関与して

編集委員 山本千秋

名古屋大学史編集委員会の第一回は昭和六〇年二月一四日(木)に開催され、編集についての規程作りから始まった。委員会の開催が重なるにつれて、未経験な私には歴史編集が大変であることを知った。と同時に、非常に勉強にもなった。歴史を編纂することは、資料収集から始まるが過去の証拠を集めることであって大変な仕事(作業)となる。参考のために他で出版されている「歴史書」を読んで感じたことは「良い歴史書」ほど、多くの資料をもとに苦心されているようであった。このことから思うに、いま、完成した『部局史編』、『通史編』そして『写真集』を並べて見るとき、加藤総長以下、編集室員の方々を先頭に学内の人々や大学と関係のあった先輩諸氏が結集した成果であったことをしみじみと感じ、良い大学史が完成したと思っている。

さて、五十年史と言っても、その以前もあって本年(一九九六年)からさかのぼること一二五年(一八七一年)が名古屋大学の発祥の時であった。(稿本 名古屋大学医学部百十五年史 参照) 今回の五十年史のうち医療技術短期大学部(医療短大部)は創設が昭和五三年(一九七八年)と比較的に新しい。しかし、以前は医学部の附設学校として医療技術者の養成が行われており、看護学校と助産婦学校は明治二七年に設置されている。私は医療技術